中学３年

「多元的創造的対話を求めて」
――世界の子どもたちと広島　インターネットから――

柳　田　嘉　久・佐　橋　喜世恵
三小山　博　昭・川　田　基　生

１．学年テーマについて

(1)　学年テーマの諸前提

①　文部省指定研究（1995年）
研究委託事項「学習の遅れがちな生徒に適応した教育課程の研究開発」
研究主題「自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる教育課程の開発」
――「総合人間科」設置の試み――

②　第一次学校改革案（1989年）
平和教育、国際化を中心テーマとする中高一貫のカリキュラムづくり宿泊行事を中心とした学校行事および関連カリキュラムの具体化

③　教科　総合人間科（中高６年一貫の総合学習）

④　研究主体　中学３年学年担任団４名
柳田嘉久（数学）佐橋喜世恵（養護）三小山博昭（英語）川田基生（社会）

②の第一次学校改革案により中学３年では広島での平和学習が恒例行事として定着している。
(1)の学年テーマの前提を包括しつつ、全体としての教育目標を以下のように４月に設定した。

(2)　全体的構想・学年としての教育目標

①　学習指導
学ぶことの楽しさの共有
(a)学習遅進生徒への対応
(b)新しい教材をとおしての総合学習
(c)受験にとらわれない15才の豊かな学習

②　生活指導
信頼とやすらぎのある気持ちのいい学校生活
(a)責任ある行動による信頼感を尊重し
(b)豊かな人間関係を目指し
(c)思慮深さ、探究心を育てる

③　指導の理念
ENCOURAGEMENT と ENLIGHTENMENT
(a)勇気づける　自信を持たせる
(b)啓発する

学習の遅れがちな生徒に対応した教育をすすめるために、わたしたちは学ぶことの楽しさをたいせつにすることを考えた。学問の楽しさを味わうことのできる新しい教材を共に学ぶことによって中高一貫の本校の受験にとらわれない15才の豊かな学習の実現をめざしたのである。そのために、学ぶことの楽しさの共有できる集団づくり生活指導の目標の設定した。

教師の姿勢も、学ぶことの楽しさの共有のために、啓発と勇気づけがキーワードとなるようこころがけた。

(3)　学年テーマ「多元的創造的対話を求めて」

學而時習之　不亦説呼　有朋自遠方來　不亦樂乎

「学問をタイムリーに勉強し、勉強したことをしかるべき時に何度も繰り返しおさらえする。その度に理解が深まり、自分のものとして体得される。それこそ人生の喜びではないか。またこうして勉強していると、学問について志を同じくする友達が、遠いところからやって来て、学問について話し合う、それこそ愉快なことではないか。」吉川幸次郎訳

私どもは、学習の遅れがちな生徒も学問の喜びを知り、学問について話し合う愉快な学習、高校入試と無縁の中学３年の遊ぶように没入できる、こころとこころのふれあう、ひとりのこころから他の心へとひらめく、ひとびとをむすびつけるような学習を企画しようとした。

学年の教育目標は学問の喜び楽しさを知ることですが、その楽しさのなかでも学問について話しあう愉快さを学年テーマとした。語り合う相手としては、班別研究の学友、書物の著者、インターネットの向こう側の外国の生徒、千種区老人クラブの方々、大学の先生、名古屋大学の留学生、広島の被爆者老人ホームの方々などであった。

２．学習方法と指導体制について

(1) 全体計画の考え方としての広岡亮蔵論文

わたしたち中学３年担任団は新しい教育課程開発に取り組むにあたり、日本カリキュラム学会の最近の研究を検討し、その中で、本校の元校長でもある広岡亮蔵の1993年の論文を学年担任団の教育課程開発の導き糸とすることにした。

日本カリキュラム学会機関誌「カリキュラム研究」第２号　広岡論文「実感がある、生きたカリキュラム研究を」の内容をわれわれの当面している課題に即して要約すると、

『今後の教育の目標は教育を人間化し、しかも個性化することである。子供たち各自の自己実現を主軸に生涯にわたっての問題解決の能力の育成こそ教育の魂これに向かっての学校知の良い在り方を打ち出そう』となる。

(2) 学校知の問い直し

わたしたちは上記の線にそって学校知の良い在り方を求め以下７分野での新教材、教育課程開発を試みた。

① 道徳教材の工夫としての読書指導
② 戦争中の暮らしの在り方に着目した平和教育教材の構成
③ 昭和史の詳細な学習、40種類のルポの読書からなる社会科教材の開発
④ ラジオ講座 NHK「基礎英語」を併用する生きた英語教育
⑤ パソコンソフト「一太郎」で文書作成
⑥ 視聴覚教育の充実と映画鑑賞
⑦ パソコン通信　海外の学校との交流学習

(3) 生徒教員の編成、授業時間の運用

①から⑦のうち生徒全員がパソコンで文書作成が出来るようになった事例を以下、報告する。

パソコン学習

［目標］

① 高度に進む情報化社会への対応の一つとして、「パソコンを主体的に活用できる」土台をつくる。
② 広島への修学旅行の「しおり」と「総合人間科」の一年間のまとめである「研究集録」の文章をすべてワープロで作成する。
③ スムースにインターネットの操作ができるようパソコンに慣れる。

［実践過程］

現在本校の視聴覚教室には、25台のコンピュータ（NBCPC-98シリースが22台、マッキントッシュが２台）がある。今回、本学年としては「マッキントッシュ」はインターネット用、「PC98」はワープロソフトとして「一太郎」を用いワープロ用として使用した。

PC98は「ウィンドウズ3.1」がインストールされていてマッキントッシュの操作とよく似ている。そのため「一太郎」で文書作成することによりマッキントッシュの操作方法にも慣れることになる。したがって、まず「一太郎」で文書作成することからパソコン学習にはいった。

81名を約20名ずつの４つのグループに分け、ローテーションを組み隔週２時間（土曜日の３・４時限）ずつの学習を６月から始めた。したがって、最後のグループが１回目の学習を終えたのは９月初旬になった。

パソコンの修得阪コツは「習うより慣れろ」にしたがい、１回目から盛り沢山の内容を学習した。

〈第１回目の学習内容〉

① 視聴覚教室利用にあたっての心得
② マイコンの使用の心得
③ 「ウィンドウス3.1」の立ち上げと「一太郎」の起動
④ マウスの使い方（クリック、ダブルクリック）
⑤ キーボードの使い方（リタンキー、スペースキー、エスケープキー、ゼリートキー、ハックスペースキー）
⑥ キーボード入力（ローマ字入力、カナ入力）
⑦ ホームポシション（指を10本つかうのが上達の早道）
⑧ 基本文書の入力と変換
⑨ 文書の「保存」
⑩ 「一太郎」の修了と「ウィンドウス3.1」の終わり方

９月中旬からは、本格的な修学旅行の準備に取りかかり正規の授業（土曜の３・４時限目）は主に「しおり・記録」係の者22名がパソコンを利用した。

10月27日から実施予定の修学旅行の「しおり」と事前の研究内容（研究テーマ、戦争中のくらしについての研究、原爆の被害など）の打ち込みに取り組んだ。

授業後も週に２～３日視聴覚教室を開放したが「しおり・記録」係の者以外も多数利用した。

〈第２回目の学習内容〉

① １回目の復習
② １回目に保存した文書の「読み込み」
③ 修学旅行の「しおり」打ち込み
④ 「罫線」の引き方、「各種記号」の入力
⑤ 文書の印刷
⑥ 部首入力
⑦ その他

修学旅行後（11月）は、正規の授業ではパソコン学

習はほとんど行なわず、授業後等を使い修学旅行のグループワークの研究成果を含んだ「総合人間科の一年間のまとめ」である「研究集録」の作成に取り組んだ。

授業後も週に１～２日視聴覚教室を開放したが多数利用し盛況であった。

「しおり」（B6版で62ページ）にある
フィールドワークの行程」の一例

B 組 4 班

研究のテーマ	今も残る戦争による傷痕inやすらぎ園				研究	加藤　福田	
研究のねらい	戦争の体験話を聞く						
班長	大隅	記録	桃井　古田	美化・保健	福井	レク	石川

行程

広島駅 11.20 …… お好み焼き屋 11.30 …… バス停広島駅 12.10 ……
バス停牛田新町二丁目 12·20 …… やすらぎ園 1 30～2 30 …… バス停牛田新町二丁目
…… バス停八丁堀 ═══ 広島駅 3 58 ～～～ 宮島口 4 24 ……
宮島口桟橋 4 40 ～～～ 宮島 4.50

訪問先	住所	電話番号
神田山やすらぎ園	732 広島市東区牛田新町１丁目18-2	(082)223-1294

「研究集録」の目次（B5版で約160ページ）

1　はじめに
2　研究にテーマ
3　事前学習　映画
4　事前学習　昭和史
5　事前学習　英語
6　広島フィールドワークのコース
7　原爆の被害（統一テーマ）
8　フィールドワーク研究報告
9　広島語り部さんのお話
10　旅行の感想文
11　戦争中の暮らしについての研究
12　老人クラブ聞き取り調査
13　インターネット　情報検索
14　インターネット　ホームページ
15　インターネット　文通
16　パソコン学習
17　資料　宣言文
18　資料　礼状
19　資料　アンケート
20　編集後記

全員が文書作成はできるようになった。

文章を書くことを面倒に思ったり自分の考えや意見をまとめたり伝えたりすることが苦手な生徒も、ワープロなら文章を書いたり消したりの推敲が気軽にそして簡単にできるため楽しく熱心に取り組んでいた。

「パソコン学習」の授業風景

3．指導過程

(1)　年間指導計画

１学期

興味の喚起

(1)　学習意欲・興味の喚気　集団としての動機づけ　あたらしい認識　分析

(2)　探索　基礎的小事項の学習

２学期

スケッチの提示

(3)　提示　重要部分の伝達　スケッチの提示　提案

対話と模索

(4)　調査と討論　個別・グループ別の学習　学習材料の収集　学習態度形成

特別な課題を優秀な生徒へ

３学期

多くの認識を一つの全体的認識へ統合

(5)　まとめと表現の練習　まちがいの訂正と表現の練習

(6)　学習の社会化　口頭発表と質疑応答・討論　レポート

年間指導計画を立てる上で留意したのは、生徒が調査や研究を始める前に、その分野・領域の知識の質と量を充実させることであった。一学期に基礎的小事項の学習を時間をかけてやることにした。映画鑑賞とインターネットによる情報検索をとりいれ、二学期からの生徒の調査研究の土台づくりをした。自主研究に先立つ基礎的小事項の学習は教科書とマンガ程度の知識の生徒もいる現状から考えて是非とも必要な学習過程と思われる。

生徒の調査報告の文章には「ケニア（テニアン島）から飛んできたB29の爆撃で名古屋は」など無数の基礎的な事項についての無知が含まれる。そこで一学期

に基礎的小事項の学習の時間を設定した。

また、一学期にたくさんの新知識を吸収させ、二学期にそこから新しい認識に進ませようという考え方が上記のものである。

三学期には学習の社会化をはかり、ここでもまちがいの訂正を手厚くすることとした。

(2) 具体的展開

4月	オリエンテーション	目的と内容　7種類の新教材の説明
5月	学習意欲・興味の喚起 集団としての動機づけ	映画鑑賞「二十四の瞳」 広島フィールドワークオリエンテーションとグループ作り
6月	パソコン学習 基礎的小事項の学習	一太郎の完全習得 昭和史の理解　世界恐慌と農村の惨状
7月	基礎的小事項の学習 インターネット	昭和史の理解　戦争中の暮らし 内容説明と活動計画提示
9月	インターネット	資料検索の開始　ホームページ作成　アンケート発送文通の相手校さがし
	広島学習	課題を提示しグループ研究はじめる 文化祭での総合人間科についての発表準備 内容はインターネットによる被爆被害についての情報検索の成果報告
10月	広島旅行準備	グループ別の研究テーマの事前研究　フィールドワークのコース検討
	インターネット	アンケート結果の集計とアンケート内容の改訂
	パソコン学習	グループ別の研究内容の記録
	広島学習	広島市周辺でのグループ別フィールドワーク実施
11月	広島学習	グループ別の研究のまとめ
12月	広島学習	グループ別の研究のまとめ
1月	広島学習	広島研究集録の編集、パソコンで文書作成
	インターネット	アメリカの学校の生徒との文通
2月	研究発表会	口頭発表と質疑応答・討論
3月	研究発表会	口頭発表と質疑応答・討論

4．生徒の取り組み状況と変容

1学期に、学習意欲・興味の喚起として、映画鑑賞を行った。「二十四の瞳」、「火垂るの墓」、「ビルマの竪琴」などを鑑賞したのでが、戦争による悲惨な死、苦しみ、むごさについて心を痛めた生徒が多かった。以下に生徒の感想文を抜粋する。

『この映画は、できることなら見たくなかった。なぜなら、とても気持みが辛くなるから、涙が出そうになる。物がないので、弱い者が次々と死んでいく。老人、病人、幼児なと。それを救うものはだれもいない。自分が生きるのが大変だから。つくづく人は弱いと思う。この映画は、人の弱いところをさらけ出している。もちろん戦争の恐ろしさも語っていたけれども……。』

『妹が栄養失調になったら、治してやろうと頑張ったのに死んでしまってとても悲しいシーンがあって、寂しい映画でした。僕は、そんなにこの映画は好きな方じゃありません。多分、悲しすぎるのであまり見たくないという気持ちが強くて、好きなほうではないというふうになったんだろう。』

また、修学旅行での体験を深め、国際的視野を広げるために、そして情報化の時代に対応するために、基礎英語を学び、読書をし、パソコン（一太郎）を生徒全員使用した。パソコンは、初めて触ったという生徒もいたが、興味・関心が高く授業後も学習したいと希望するものが大勢いた。夏休み中も、積極的にホームページづくりに生徒は参加した。

2学期に入り、インターネットを使って、アンケートを実施した。世界から送られてくる英文の返信に対して、英語が苦手な生徒が何時間も辞書を使い一生懸命和訳する姿も見られた。以下に生徒の感想文を紹介する。

『僕たちの班は、インターネットはもとよりコンピューターについても知識の浅い人ばかりでした。そのためか、初めはみんな関心が無く、全く進みませんでした。しかし、日本語を作り英訳し、メールとして送り出すと、みんなの気持ちの持ち方も変化してきました。夏休みに学校へ来て、僕が自分達の班のメールを個々の学校へ送りました。送る際に班全員が一番関心

を高めていたのが、相手校（他国）の人達と、我々日本人とでは、考え方がどこでどう違うのか、そして、拳銃についてでした。持つことを禁止している日本人の我々から見ればとても見慣れず、恐ろしい人殺しの道具というイメージがあります。しかし、アメリカなどは所持、無所持は自由ですから、拳銃に対しての考え方が違うはずです。また、日本の親が子供によく言う事と、他国の親が子供に言う事にはどんな違いがあるかなどの関心を高めたのは、自分達との「違い」というところでした。しかし、2学期の修学旅行が終わっても、関心の高まってきた我々の期待を裏切るようにして、一通も返ってきませんでした。ただでさえ人間関係は難しいのに、まして声を出して会うこともなく会話をするのは、ものすごく難しいのではないかとショックを受けました。そしてたくさん返ってきた他班のメールをもらって参考にしました。そして分かったことがいくつかありました。親が子供に対して言うセリフは似ており、少し驚きました。そして親しみを感じました。また最も注目していた拳銃については、予想と少し違ったものでした。まず、所持している人が（家族も含む）が少なく、「危険な物」という考えが多かったことでした。戦争、原爆に対しては多少の違いがありましたが、他のことに対してはあまり考え方が違わず、とても親しみを感じました。これらの答えの感想、特に拳銃についての自分達の意見や、新たな質問を書いて、返事のメールを送ります。これから堅い話ばかりでなく気軽な質問のやり取りを今回の相手の人達や、そして新たに今度は一人一校（ひとり）という感じでやっていきたいなと思います。目先のことを考えると、インターネットは何の利益もない無駄なことに思えます。しかし、社会に出てからのことを考えると、入試勉強なんかよりずっとすごい勉強をしているのではないかと誇りに思いました。』

『私が興味を持ったのは、なぜ原爆が落とされたのかという質問の答えです。どの人もだいたい同じ答えで、戦争を終わらせるため、といっています。ずいぶん簡単な答えというか、はっきりした答えには驚きました。彼らは広島、長崎の原爆の被害をよく知らないのではないかと思います。もし彼らが今と逆の立場、つまり原爆をおとされた側だとしたらどういう答え方をしたのかとても興味があります。このようにインターネットを通じ、国境を越えて文通ができ、いろいろな意見、情報交換できるということはとても素晴らしいことだと思います。これからも平和について日本だけでなく、世界の人々と一緒に考え学んでいきたいです。』

どの生徒も、修学旅行での体験やインターネットを通して、戦争の悲惨さやむごたらしさを感じるだけにとどまらず、積極的に平和について考えていこうという態度が見られた。以下に修学旅行でお世話になった方々へ生徒のお礼状の一部を紹介する。

『このたびは、辛いことを思い出し僕たちに話をしてくださりありがとうございました。決して今回のことは無駄にしません。みなさんのお話は、僕の人生を考えさせられるものがありました。これからの社会を築く一人として。』

『おじいさんは原爆による腕の傷を私に見せてくださり、私はその時、「もう2度と戦争を起こしてはならないのだ。私たちが世界から戦争を消さなければならない。」と、強く感じました。』

『私は、今回学ばせていただいた知識を生かしてよりいっそう平和学習について学ばなければならないと思います。今も原爆の後遺症に苦しんでいる人々の事実や他国の核実験による被害者、何の罪もない悲惨な事実を。そして私たちの日常と深く関わっている原子力発電所の問題や身近な電化製品と放射能の関係などを。私たちは、放射能というものの未来についても考えていかなければならないと思います。』

『こんなに美しくて平和な島でも過去には毒ガス製造というショッキングな事実があったことは、戦後半世紀たった今ではとても信じがたいことです。しかし、自転車で島を一周する間に実際に倉庫跡に入ってみたこと、そして何よりもそこで働いていた方にお話を聴くことができ、当時の状況を生々しく感じとることができました。これから先、戦争がまた起こるかもしれません。それを阻止するためにもこれからは僕たちの次の世代にもずっと語り継いでいこうと思います。島に住んでいるウサギたちにも、もう2度と不幸が訪れないことを願います。それから毒ガスによって命を奪われた人々にも深くご冥福をお祈りいたします。』

『私たちはこの貴重な話をインターネットという世界通信で世界の人々に知ってもらおうと思います。また、私たちの後輩にも受け継いでもらおうと考えています。私は、Kさんが話の途中言葉をつまらせて目に涙をためていた時、言い尽くせない原子爆弾への怒りと悲しみがあるのだろうと思い、つい涙ぐんでしまいました。私も原子爆弾には絶対反対です。フランスや中国にもこの話を知ってもらい、核兵器のない平和な世界を一緒につくっていこうと思います。また、いじめの問題についても訴えていこうと思います。いじめはする側もされる側も幸せにはなりません。もし、いじめを見つけたら進んで手をさしのべるような人間になりたいです。幸せな21世紀のためにも。本当に貴重な話をありがとうございました。Kさんは、私の生き方を考えさせてくれた「出会いの人」です。』

また、千種区老人クラブの方々から実際に出兵したときのお話も伺い、戦場での生活の苦しさも生徒達は肌で感じたようた。以下に生徒の報告文を紹介する。

『Ｓさんは、昭和14年に入隊し、上等兵として戦地に行き、戦争中はずっと向こうへ行っていました。さすがに、本とかで読むよりすっと迫力がありました。まず、食料が全然送られてこないので、食べていたものは、カエル、ヘビなとを生で食べていたそうです。今は、食べたい時に食べたい物が好きなたけ食べれるけと、それは昔の人の苦労があったからだと思います。

『帰ってきて、役所へ行き戸籍を見たら、赤くペケが書かれており戦死になっていたそうです。そして家に帰ると、家族が仏壇を拝んでいて自分の位牌があったそうです。とても変な感じだったと言っていました。このように興味深い話がまたまだあります。また全部聞いていないのて是非聞いてみたいです。そして、世界が平和になるように、地球上から核兵器がなくなるよう頑張っていきたいです。』

５．THE SECOND STAGE　実践・第２段階

４月当初、パソコン通信にも取り組もうという話し合いはしていたが設備や費用の面で可能かとうか、実現できるのか確信の持てない状況にあった。ところが、その後名古屋大学教育学部の大谷研究室の支援もあってインターネットが本校に導入され、中学３年がインターネットを利用することとなった。やりはじめてみると、簡単で楽しい、そして効果的、生徒も非常に熱心、なと良いことはかりである。今後の課題として論ずべきは、このインターネットを使った教育の充実と考えられる。

今年度われわれがインターネットについて苦心したのはコンピュータではなく英語の指導であった。そこでインターネットと英語についてより詳しく、生徒の実態、興味、指導の実際と英語科の教育との連携性なとについて述べることにする。

インターネットと中学英語

① はじめに

中学３年生は、本年度本校に２台導入されたマッキントッシュを研究旅行の事前指導に役立てようと試行錯誤の末、ネットサーフィンを利用することで学年の意見が統一された。ネットサーフィンには数々の原子爆弾に関する記述が掲載されているか、その中て我々学年団か選んたのは、「A-Bomb WWW Museum Version 2.1 (August 11, 1995)」（以下「A-Bomb WWW Museum」）というものであり、その記述の全訳を試みる運ひとなった。我々が「A-Bomb WWW Museum」を選んだ理由は、極めて単純であり、まず第１にこの記述には100ページを超えるものであり、２クラス80名の生徒たち一人一人に十分行き渡ることはあってもまず足りないということはありえないということ、第２に写真、図解の掲載が多く、生徒の興味を引くであろうと考えられることであった。

② 指導過程

我々学年団の大きな課題は現中学３年生がこの「A-Bomb WWW Museum」果してとのレベルまで読み進めて行き、とこまで理解してゆくことができるかということであった。中学の３年間で生徒が学習する英単語は多い生徒で千数百語、英語に遅れがちな生徒では二、三百語足らずしかない。そんな生徒たちが、世界に発信されている、論文を読み、理解までもいかないにしろ、英和辞典を何十回も根気よく引き、日本語に置き換えるという作業に飽きることなく没頭できるかという不安を抱えながら、以下のように指導を試みてみた。

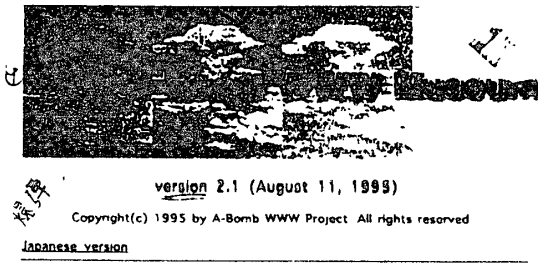
1．２学期早々、英語の成績の良い生徒、数名をピックアップし、模擬的に数箇所の翻訳をしてもらう。
2．上記の段階である程度の和訳が可能であると判明したため、総合人間科（土曜、２、３時間目を利用して、全生徒に分担部分を配布し、作業に取りかからせる。
3．ほとんとの生徒が与えられた時間内に完成しないため、提出までに１週間程度の期間を与える。
4．文化祭てすべての生徒の和訳を展示し、校内他学年生徒のみならす、全教員、保護者の目にも触れるようにする。

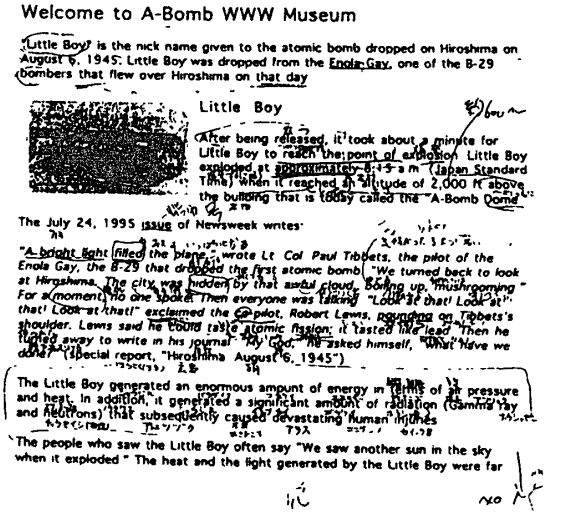
指導上の留意点

1．翻訳箇所を全生徒に割りふる際に、英語を得意としない生徒には、写真、図解解説の多く入っている箇所を割り振る。
2．提出後に、一通り目を通すが、誤訳、訳不明瞭箇所なとを指摘したり、訂正したりすることは極力しない。
3．質問にはできるたけ協力し、単語の意味、文の繋がりなとも尋ねられたり、教えるようにする。

③ 生徒の具体的活動の例

比較的英語を得意とする生徒（A君）





Welcome to A-Bomb WWW Museum

"Little Boy" is the nick name given to the atomic bomb dropped on Hiroshima on August 6, 1945. Little Boy was dropped from the Enola Gay, one of the B-29 bombers that flew over Hiroshima on that day

Little Boy

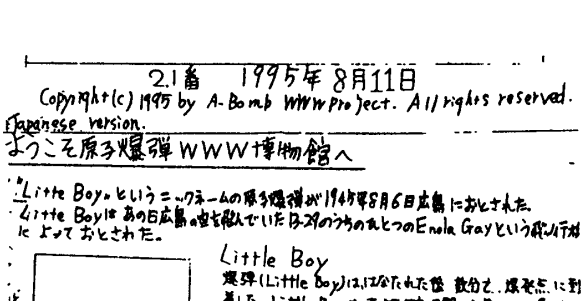
(After being released, it took about a minute for Little Boy to reach the point of explosion. Little Boy exploded at approximately 8:15 a.m. (Japan Standard Time) when it reached an altitude of 2,000 ft above the building that is today called the "A-Bomb Dome".

The July 24, 1995 issue of Newsweek writes:

"A bright light filled the plane," wrote Lt. Col. Paul Tibbets, the pilot of the Enola Gay, the B-29 that dropped the first atomic bomb. "We turned back to look at Hiroshima. The city was hidden by that awful cloud, boiling up, mushrooming. For a moment, no one spoke. Then everyone was talking. "Look at that! Look at that! Look at that!" exclaimed the co-pilot, Robert Lewis, pounding on Tibbets's shoulder. Lewis said he could taste atomic fission: it tasted like lead. Then he flipped away to write in his journal: "My God," he asked himself, "what have we done?" (special report, "Hiroshima August 6, 1945")

The Little Boy generated an enormous amount of energy in terms of air pressure and heat. In addition, it generated a significant amount of radiation (Gamma ray and Neutrons) that subsequently caused devastating human injuries

The people who saw the Little Boy often say "We saw another sun in the sky when it exploded." The heat and the light generated by the Little Boy were far



2.1番　1995年 8月11日

Copyright(c) 1995 by A-Bomb WWW Project. All rights reserved.

Japanese version.

ようこそ原子爆弾WWW博物館へ

"Little Boy"というニックネームの原子爆弾が1945年8月6日広島におとされた。Little Boyはあの日広島の空を飛んでいたB-29のうちのひとつのEnola Gayという飛行機によっておとされた。

Little Boy

爆弾(Little Boy)は、はなされた後 数分で、爆発点に到着した。Little Boyは、ちょうど日本時間の午前8:15頃、その建物から2000フィート(約600m)の上空に到着した時爆発した。今では、その建物は"原爆ドーム"とよばれている。

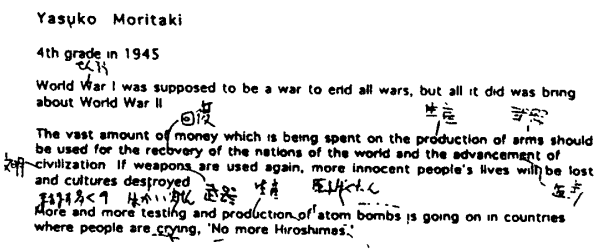
1995年 7月24日号のある週刊誌より

原子爆弾を最初におとしたB-29のうちのEnola Gayのパイロットの Lt Col. Paul Tibbetsは"機内は明るい光でいっぱいになった。"と言った。"私たちは広島を見るためにもどった。広島はおろしく大きな雲によって隠されていた。キノコ型の雲がどんどんふくれあがってきた。その瞬間、だれもが黙ってしまった。それから、みんな話していた。"あれを見て!"と Lt Col. Paul Tibbetsのパイロットの Robert Lewisがさけび、Tibbetsの肩をたたいた。彼は原子力を味わうと、どのように味がするかを見てみたかった。それから、彼は日記を書くために顔をそむけた。"神よ!"と彼は自分自身にたずねた。"私達は何をしているのだ?"(特別報告"広島:1945年8月6日")

Little Boyは莫大な熱と光のエネルギーを合体したものを持っている。また、見えないたくさんの放射線をもっている。(ガンマ放射線と中性子。)それらは、人間の生や地域を苦しめる原因となるだろう。

生徒の全訳を見てみると、細かい文法事項、例えば "Little Boy" is the nick name given to the atomic bomb……（2行目）の文法用法、2,000 ft above building that is called……（9行目）の関係代名詞の用法を、訳の上から判断する限りにおいて、この生徒は認識していないことがわかる意訳としては申し分ないが。……, Robert Lewis, pounding on……（16行目）の彼の訳もいまひとつ的を得ていない。など細かく見てみると、彼の苦労の様子がうかがえる。

英語を得意としていない生徒（B君）



Yasuko Moritaki

4th grade in 1945

World War I was supposed to be a war to end all wars, but all it did was bring about World War II

The vast amount of money which is being spent on the production of arms should be used for the recovery of the nations of the world and the advancement of civilization. If weapons are used again, more innocent people's lives will be lost and cultures destroyed.

More and more testing and production of atom bombs is going on in countries where people are crying, 'No more Hiroshimas.'

もりたき やすこ

1945年に4年生だった。

第一次世界大戦がすべての戦争を終わらせるはずだった。

しかしそれは第二次世界大戦をひき起こしたにすぎない。

武器の生産に大きな金を使わず自然の回復や文明の進歩に使うべきだ。もし再び武器が使われたならば、けがれなき命がうばわれ文化もほかいされる。

ますます多くの原子ばくだんの実験生産は、広島をくり返すなと人々がさけんでいる国々で続けられている。

彼の成績のみから判断すると、彼には申し訳ないが、ここまで、自分の力のみで翻訳ができたとは、言いがたいものがある。しかし、英文中に書かれている、単語の意味は、紛れもなく彼の筆跡であることは、翻訳の筆跡と比較して判断できる。彼の割り当ての英文は、A君ほど多くはないのだが、それが幸いして、少しは、自分で、単語の意味を調べようと努力している様子が感じられる。それに、いい加減な翻訳を提出してこず、日本語のよく意味が通る文を作成してきている点もA君に負けず劣らず評価できる。

④　まとめ

「A-Bomb WWW Museum」の翻訳のまとめとして、9月に行われた本校の文化祭で生徒の力作を展示してみた。見学者のアンケートの一部を抜粋したのでご覧いただきたい。

- 中3のインターネット、パソコンを利用しての研究には、びっくりしました。また、これだけの「A-Bomb WWW Museum」を力を合わせて和訳したのは凄いと思います。
- インターネットの所をもっとたくさん展示して欲しかった。

という肯定的な意見もありましたが、中には

- 本当に中3の生徒が独力でやってのけたのだろうか。実際には他の人の手助けが多々あったのではないですか。

という疑問の声もあった。

この3つの意見、感想はどれも的確に要点をついていると思う。生徒が独力でやったにせよ、他力本願で完成させたにせよ、この試みは、中学3年生の総合人間科、研究旅行を推し進めていく上で、生徒にとっても、我々指導者にとっても、大きな自信に繋がったと自負している。